

牛込有里

お茶の間のさくらももこ像と本当のさくらももこ

要旨

本研究は、一般にほのぼの、心温まるといったイメージで語られがちなさくらももこ像に対し、その作品に内在する本質的な作家性を再検討することを目的としたものである。特に、エッセイ漫画という表現ジャンルの成立と展開におけるさくらももこの位置づけに注目し、原作『ちびまる子ちゃん』および関連作品の分析を通じて、彼女の表現の核心に迫った。

分析の中心として、原作漫画とアニメ版『ちびまる子ちゃん』を比較し、アニメ化の過程で原作に含まれていた毒やシニカルな視点、シュールなユーモアがどのように改変・緩和されてきたのかを具体例とともに明らかにした。

その結果、国民的アニメとしての受容を優先する中で、家族向けの道徳的・感動的要素が強調され、作者本来のドライで批評的な視点が薄められていることが確認された。

さらに、エッセイ作品や『COJI-COJI』、『ガロ』との関係性も踏まえ、さくらももこが一貫して人間の弱さやずるさを描き続けてきた点を指摘した。

以上より、本研究は、メディアを通じて形成された表層的なイメージでは捉えきれない、さくらももこの作家としての本質的魅力を再評価する試みである。